

日本フランス語フランス文学会

cahier

37

mars 2026

I 2025 年度秋季大会の記録

ワークショップ

1 『人間喜劇』全訳版刊行プロジェクト始動にあたって

松村博史 柏木隆雄
村田京子 鎌田隆行 1

2 『メダンのタベ』再読——戦争、自然主義、女性の表象

足立和彦 福田美雪
安達孝信 6

3 今、ユートピアを問う

小倉孝誠 井田 尚
福島知己 宮川朗子 12

4 クンデラと私——作家を追悼することについて

篠原 学 塩谷祐人
ローベル 柊子 須藤輝彦 17

5 Discussion sur le Choix Goncourt du Japon 2026 : impressions de lecture avant sélection

Éric Avocat Marie-Noëlle Beauvieux
Vincent Brancourt Justine Le Floch Olivier Sécardin 23

II 書評

Guilhem Farrugia (dir.), *Influences de Baudelaire*, Presses Universitaires de Rennes, 2025.

中島淑恵 27

ミシェル・ビュトール『ミシェル・ビュトール評論集 レペルトワールIV』、石橋正孝監訳、幻戯書房、2024年

塚本昌則 29

大出敦『余白の形而上学 ——ポール・クロードルと日本思想』、水声社、2025年

大須賀沙織 32

クロード・ピショワ、ミシェル・ブリックス『ネルヴァル伝』、田口亜紀、辻川慶子、畑 浩一郎訳、水声社、2024 年

鈴木啓二 35

宇野木めぐみ『時代で読み解く一八世紀フランス文学——旧体制下の読書熱、サロン、哲学者たちの闘い』、大阪大学出版会、阪大リーブル 78、2025 年

阿尾安泰 37

福島知己（編）『シャルル・フーリエの新世界』、水声社、2024 年

王寺賢太 40

ワークショップ1

『人間喜劇』全訳版刊行プロジェクト始動にあたって

コーディネーター：松村博史（近畿大学）

パネリスト：柏木隆雄（大阪大学・大手前大学名誉教授），村田京子（大阪府立大学名誉教授），鎌田隆行（信州大学）

このたびバルザックの『人間喜劇』の全訳版の翻訳が水声社から刊行されることになった。これまでも「バルザック全集」の試みはあったが、『人間喜劇』の全ての作品を網羅するものではなく、また配列も翻訳者あるいは出版社の意図による恣意的なものであった。今回の『人間喜劇』全訳版は、バルザック自身が構想した1845年の作品カタログおよびその後の作者自身による修正に基づくもので、未完作品や構想のみの作品もカタログの順序通りに配置し、バルザックの専門家による解題を加えている。またこの全集では、バルザック自身が執筆した、あるいは他の著者に直接指示して執筆させた序文などを収録していることも大きな特徴である。

本ワークショップでは、『人間喜劇』全訳版刊行という壮大なプロジェクトを始めるにあたり、プロジェクト責任編集者の一人である柏木隆雄、バルザックの作品群を構成する各情景・研究の編集担当者（松村博史、村田京子、鎌田隆行）が全集の編集方針とその意義を明らかにした。

『人間喜劇』全集翻訳と 1845 年のカタログの位置付け

松村博史

最初に松村が作家バルザックにおける全集の意味について説明した。今回の水声社版『人間喜劇』全集は、バルザック自身が 1845 年時点での全体プランをまとめた「1845 年のカタログ」の構成に基づいている。バルザックは最初から、新しい作品を書き上げると同時に、それらを将来の全集の中に組み込むことを企てる作家であった。バルザックはつねに「全集の思考」をもって作品を書いていく作家であって、そこにバルザックの「全集」を小説家が考えた通りの構成と順序で刊行することの意義がある。

バルザックが過去に考えた全集の構想には、1830 年前後における『私生活情景』と『哲学的長編・短編小説集』、1835 年前後における『十九世紀風俗研究』と『哲学的研究』などがあった。そして 1840 年以降に構想されたのが『人間喜劇』である。この「全集」についてバルザック自身は 1842 年の『総序』でその構想と意義を説明し、1845 年のカタログで全体の構成と順序を示していた。だがバルザックの全集とはつねに進化し続ける総体と考えるべきであり、『人間喜劇』もまた更なる発展の可能性を秘めていたと言えるだろう。

日本におけるバルザック全集と水声社版『人間喜劇』刊行の意義について

柏木隆雄

1895 年（明治 28）、バルザック『砂漠の情熱』を尾崎紅葉門下松居松葉が『猛虎』と題して発表したものが日本におけるバルザック翻訳の最初と言われているが、以後今日に至るまでバルザックの『人間喜劇』中の作品およそ百篇は、『ヴァンデッタ』、『アルシの代議士』、『ゴディサールⅡ』を除いてほとんどその訳が刊行されている。バルザックは生前から自分の著作を叢書、あ

るいはテーマ別の作品集として発刊するのが常としたが、日本の翻訳においても、『傑作叢書』、『選集』、『全集』という名で、何度も作品集が翻訳刊行されてきた。1920年代には谷崎潤一郎や菊池寛などが英訳のバルザック全集を読んで創作の糧としたように、1935年あたりに刊行された河出書房版『バルザック全集』をはじめとして、戦後1959年から1976年にかけての創元社版『バルザック全集』全26巻、1999年から2011年までの藤原書店版『バルザック『人間喜劇』コレクション』全11巻、そして2007年から2017年の水声社版『バルザック小説選集』全11巻など、バルザックの全貌を伺う企画が試みられ、その折々に日本の文化に貢献してきた。黒澤明の映画への影響、戦後文学への刺激、笠井潔の推理小説に登場するバルザックなど、間接、直接の影響は、今後も研究の対象となるだろう。ただしそれらの翻訳が、いずれも完全に『人間喜劇』の作品すべてを網羅するものならず、各巻における作品の配列も1845年バルザック自身が発表した『人間喜劇』総カタログの順に従ってはいずに、いわばばらばらの収録となっているのはまことに遺憾である。その意味で今回水声社から2025年11月から刊行される『人間喜劇』全20巻は、従来未訳の作品はもちろんのこと、バルザックの生前に刊行された小説のみならず、未完、未定稿の作品をもすべて網羅し、しかも未完をも含めて「総カタログ」の作品の順番に配列し、各短編、中編、長編の解題のみならず、各情景、「風俗研究」、「哲学的研究」、「分析的研究」についても全体としての「解説」の頁を置き、バルザックが構想した『人間喜劇』の再現に努める画期的な編集と翻訳の実現である。毎月配本を遵守する『人間喜劇』全訳20巻は、完成の暁には日本におけるバルザック研究の現在の水準を示すものとして、海外にも誇るべき事業となることは疑いない。

『人間喜劇』における序文の機能について

村田京子

本全集では、作者自身が書いた序文および、他人名義であっても作者が深く関わった序文を掲載している。本発表では、ジュネットの『スイユ』における序文の分析を手がかりに、バルザックの序文の機能を考察した。

『人間喜劇』以前の初期小説では、バルザックはペンネームを用い、偶然手に入った手記を敷き写したに過ぎないと主張して、作者としての責任回避の手法を取っていた。*Avertissement du Gars* も同じ手法を継承しているが、そこでは作者として自分の名前を記し、一般大衆（読者）の好奇の目に晒されることへの懸念が述べられている。バルザックはそれを「出版という名の思想の売春」と呼び、本を出版して自分の思想を切り売りすることへの抵抗感を示していた。『結婚の生理学』初版も匿名で出版されたが、『あら皮』初版の序文で、『結婚の生理学』の作者は自分であると認め、作者としての責任を負うという決意表明を行っている。それと同時に「第二の眼」など、彼独自の作家論が展開されている。

「テーマ的な統一性」をもたらす機能を果たしているのが、シャルルによる『哲学的長編・短編集』の序文で、各作品を結びつける基軸としてエゴイズムが挙げられている。ダヴアンによる『十九世紀風俗研究』『哲学的研究』の序文では、「風俗研究」の6つの情景を人生の諸段階に喩えるなど、各場景を緊密に結びつけ、全体としての統一性を図っている。

批評家に対する反論、自己弁護の場として機能しているのは、『総序』や『ゴリオ爺さん』初版の序文で、バルザックの描く女性像が「不道德」だとする批評家たちへの反論が展開されている。『娼婦の栄光と悲惨』の序文では作者は、犯罪者や娼婦を描くことで「不道德」のそしりを受けることを恐れて、社会の真実を描くために必要であったと弁明している。

また、『三十女』初版の「版元による覚書」では、各エピソードの主人公の名前を、一人の人物にまとめるよう作者に提案したが受け入れられず、そのまま掲載した旨が述べられている。この序文はバルザックの意向を汲んだものとされ、その場合、「避雷針」の役割（批評家の機先を制するための予防的自己批判）を果たしていた。第二版の序文では、バルザック自身が批判に対する答えとして、自らの考えを明らかにしている。

以上のように、序文は『人間喜劇』の創作過程を知る上で貴重な資料となっている。序文を通して新しい作品解釈が生まれることを期待したい。

『人間喜劇』における未完作品について

鎌田隆行

『人間喜劇』フルヌ版の刊行中に公開され、その増補新版の計画を示した「1845年のカタログ」には、結果的に成立しなかった多数の新計画が含まれていた。その後、「カタログ」よりも大幅に計画を縮小したフルヌ修正版によって「上書き」されたことにより、作者生前の最終案ではなくなったため、今日の校訂版では配列案として採用されていない。だが、この大增補計画における未完作品（大半は執筆に至らなかった「幻の作品」）には、『人間喜劇』の新たな展開可能性が秘められており、バルザックの小説世界が持つポテンシャルを再考する上で重要である。

「カタログ」に準拠した水声社版の作品配列では、『総序』を除き計 139 タイトルが掲げられ、うち未完は 53 作に及ぶ。「風俗研究」の「政治生活情景」「軍隊生活情景」「田園生活情景」、および「分析的研究」でその比率が高い。いずれも 1830 年代後半以降も構築が遅れていた領域である。

この総カタログが示す配列案にはさまざまな新機軸がうかがえる。例えば、各「研究」の冒頭部の配置に関し、現行ヴァージョンとは異なる戦略が見て取

れる。「風俗研究」では冒頭に幼年期や教育をテーマにした三作品（『子供たち』、『女子寄宿学校』、『学校の内側』）が配置される計画となっていた。また、「哲学的研究」は、「パンセが人を殺す」というテーゼを例示する『現代のパイドン』によって起動され、「分析的研究」は「人間の誕生に関しては、いかなる偶然も存在しない」とする『教師団の解剖学』で開始される予定であった。こうして三部門いずれも、人間や事物の始原、活動原理といった、素因をめぐる主題によって立ち上げられていく配列戦略が採られていたのである。

他方、全 23 タイトル中 21 作品が未達成である「軍隊生活情景」については、物語の時系列順に革命期から 1830 年代前半までを包摂する、一連の小説群の可能性が体系的に探査されていた。その中心となるのはナポレオン時代の軍役であり、『田舎医者』（1833）で元兵士ゴグラが語るナポレオン伝と密接に照応する構成が読み取れる。

このように、残された『人間喜劇』の未完作品計画からは、歴史・社会的射程からも物語的な興味からも、新たな地平が浮かび上がってくる。こうしてわれわれはこの巨編を、拡張可能性とヴァリエーションを視野に入れて読み直すことができるのである。

ワークショップ2

『メダンのタベ』再読——戦争、自然主義、女性の表象

コーディネーター・パネリスト：足立和彦（名城大学）

パネリスト：福田美雪（青山学院大学），安達孝信（名城大学）

このたび、『メダンのタベ 戦争と女たち』（足立和彦・安達孝信訳、幻戯書房リユール叢書、2025年）を刊行するにあたり、本ワークショップを企画した。『メダンのタベ』（1880）は、エミール・ゾラおよびギ・ド・モーパッサン、J・K・ユイスマンス、アンリ・セアール、レオン・エニック、ポール・アレクシの6名による共作短編集である。自然主義流派の誕生を告げるものとして文学史にも名を残しているが、ゾラ・モーパッサン・ユイスマンス以外の作品はこれまで訳されたことがなく、本書が本邦初訳となる。

こんち改めて作品集全体を読むことを通して見えてくるものがあるとすれば、それはどのようなものだろうか。本書の読みどころを探るべく、各パネリストはそれぞれの視点から報告を行った。以下、各発表の要旨を記す。

『メダンのタベ』はどう読まれたか——刊行時の書評を中心に

足立和彦

『メダンのタベ』は、パリ郊外メダンにあるゾラ邸に集う青年作家たちの文学的結束を示すものであり、自然主義宣言とも言うべき挑発的な序文を掲げた。彼らはゾラの名を借りて自分たちを売り出そうとしたが、実際、出版直後から新聞・雑誌で多くの反響を呼んだ。

『メダンのタベ』は刊行時、激しく叩かれたのだろうか。確かに、アルベール・ヴォルフやレオン・シャプロンなど保守派の批評家は序文を無礼と断じ、「凡庸で読む価値がない」と切り捨てた。一方、自然主義支持派のエドゥアール・ロッドやアンリ・ポエールらは、若い作家たちの多様性を認めている。フィリップ・ジルなど比較的中立に見える批評家も、戦争の残酷さや心理的な傷を描いた点を称賛した。全体としては、否定的意見は目立つものの、肯定的に受け取る声も少なくなかったことが窺われる。若い作家たちはみずからのペンで、その存在を認めさせることに成功したと言えよう。

作品集には全体を通して戦争への嫌悪が見られ、愛国心から距離が取られている。ではセアールが懸念したように「反愛国的」と批判されたのだろうか。確かに一部の批評家は「祖国への献身を欠く」と攻撃した。だがそのような論調は少数であり、批評家の関心はむしろ自然主義という新潮流の出現にあったように見える。そして愛国心の欠如への批判が少なかった理由は他にもあるのではないか。普仏戦争から10年、富国強兵・対独報復が叫ばれる風潮のなか、戦争そのものを批判する視点はまだ必ずしも一般的でなく、同時代人には『メダンの夕べ』は明確に反戦文学としては受け取られなかったように窺われる。

最後に、それぞれの作家はどう評価されたのだろうか。確かなのは、ゾラ「水車小屋の攻防」とモーパッサン「脂肪の塊」は高く評価されたという事実である。ゾラは反対派にも作家としての力量を認められる一方、「水車小屋の攻防」は自然主義色が薄いという理由で受け入れられた。モーパッサンは語りの巧みさで一躍脚光を浴びるが、やはり保守的な性質が成功に寄与したのかもしれない。それに対し、ユイスマンス、セアール、エニック、アレクシの4作は言及自体が少なく、下品・不道德・独創性の欠如などを批判された。ユイスマンスは不真面目な兵士を描いたとして酷評され、セアールは実在の政治家を揶揄した点で道徳的非難を受け、アレクシはゾラの「弟子」として軽視された。

しかし研究者アントニア・フォニは、こうした否認は彼らの作品が同時代の「寛容の限界」を超えていたためであり、そこには価値転倒的な性質が認められると指摘している。ゾラやモーパッサンのやや保守的な姿勢に比べ、彼らはより徹底的に戦争と愛国心を批判したのである。若い自然主義者たちが示した「見たくない現実」を描く姿勢にこそ本書の真の革新性があり、150年後の今日に読む面白さもそこにあると言えよう。

「水車小屋の攻防」と『メダンのタベ』

——遠い戦争、近い戦争、彼らの戦争

福田美雪

『メダンのタベ』に編まれた6篇の小説を結び合わせるのには、1870～71年の普仏戦争という一本の糸である。しかし、異なる個性が滲む短編はいずれも、スタンダールの描くワーテルローの戦いやトルストイが叙述したロシア遠征のように、戦闘や戦場の描写自体に力点を置いてはいない。むしろ本作を特徴づけるのは、同じ時代を生きた執筆者が集まったことではからずも浮かび上がる、第三共和政期における「戦争」という主題の重層性と言えよう。

確かに『メダンのタベ』の作家たちは、10年前に直接ないし間接的に経験した普仏戦争にまつわる自身の記憶から題材を選んだ。神話や叙事詩に始まる「遠い戦争」を語る伝統とは一線を画し、あくまで個人的な視点から眺めた戦争のみを語るという自然主義の意図は明確に共有されている。しかしそこに重なるように織り込まれているのは、彼らが生きた第二帝政を特徴づける一連の外交政策がもたらした、幾つもの「近い戦争」の集合的な記憶である。初めて戦争の記録写真が撮られ、赤十字設立の端緒ともなった1853年のクリミア戦争に始まり、長期にわたるイタリア独立戦争への介入、1860年代のメキシコ出兵、普墺戦争など、日常のなかに戦争にまつわる言説が溢れていた時代を生きたからこそ、彼らの作品には過去のフランス文学にはなかった、ある一貫性を読みとることができる。モーパッサン自身が本書の意図を『ゴーロワ』紙で明言したように、「文学の世代は入れ替わり、互いに似ていることはない」のである。

たとえば、陽気な酒保の女将や兵士の犠牲者といった類型のかわりに、婚約者のために勇気を奮い起こす「水車小屋の攻防」のフランソワーズ、将軍さえも手玉にとる「瀉血」の高級娼婦パオエン夫人、戦死した夫を運ぶ荷馬車で負傷兵士と愛を交わす「戦闘のあと」のド・プレモラン夫人など、日常が崩れ去った後の現実を生きようとする女性たちが登場する。戦争が生み出す「野戦病

院」や「兵舎」、「要塞」といった閉鎖空間も目を惹く主題であり、とくにその内部で露呈する軍人や民間人の我欲や集団心理の恐ろしさは、「脂肪の塊」や「大七事件」において抉り出される。また、短編の構成を緊密なものとする書き出しと終行の鮮やかな対比は、「水車小屋の攻防」を筆頭に、どの作品にも共通してとられている手法である。

『メダンのタベ』は、その全体が各国で読み継がれ、「戦争」を描く、あるいは語る文学の在りようを一変させた書物であるとまでは言えないだろう。しかし、たとえばユイスマンスとセリーヌの語りの親近性、モーパッサンの文体がロシアの作家イサーク・バーベリに与えた影響の深さ、1862年の南北戦争以降に書かれたアメリカ文学との比較など、『メダンのタベ』一冊を開くことで浮かびあがる問いは数多い。「戦争」を語る世界文学という歴史的文脈のなかに、ゾラやモーパッサンだけではなく、「自然主義グループ」を置き直すことで、新たな視座が開けるのではないだろうか。

ユイスマンス「背囊を背負って」加筆修正における、
自然主義的エクリチュールの探求と隠蔽される同性愛

安達孝信

『メダンのタベ』6作品のうちとりわけ非難的になったユイスマンス「背囊を背負って」では、戦場にたどり着く前に赤痢にかかり、ドイツ軍から逃げながら各地の病院を転々とする兵士の姿が半ば自伝的に描かれている。特に物議を醸したのがそのアンチ・ミリタリズムとスカトロロジーであるが、この二つの特徴は同作に内在していたものではなく、『メダンのタベ』への再録時の加筆修正によって新たに加わった要素であることを本発表は示した。1877年にベルギーの雑誌『アルティスト』に連載された第一版と、『メダンのタベ』（1880）

収録の第二版とを比較すると、文体と主題において以下のような変化が認められる。

第一に、断片的エピソードのつながりという印象のあった第一版から、より完成度の高い第二版への変化である。とくに画家の名前が参照され比喻に満ちた長大な描写が削除される一方で、登場人物の過去や行動に関わる語りが増強されている点などは、芸術的文体から自然主義的文体への変化と解することができるだろう。第二に、第二版では戦争に関わる記述が大幅に拡充されているという主題面の変化が挙げられる。もっともそれらは直接的な戦闘描写ではなく、戦場における社会階層を超えた友情という愛国神話を無効化する兵士間の対立の描写であり、祖国を守るための英雄的な犠牲を否定する無意味な負傷と病気、死の連続である。第三に、女性描写が聖女と娼婦へと二極化していることが挙げられる。兵士を看病する修道女アンジェルの当初付与されていたコケットリーは、第二版では削除され彼女が神聖化される一方で、主人公たちが触れ合う娼婦はその醜さが強調されていく。戦場の修道女にも性的眼差しを向けるという後のセリヌヘも続く系譜が、第二版では後景化している。

さらに本発表は、高潔な修道女に憧れる一方で醜い肉欲に屈してしまうという、ミソジニックで紋切り型なこの聖女と娼婦の二項対立は、同性愛的欲望を隠すように強化されていると主張した。修道女に純真な憧れを抱く語り手は、親友に連れられ塀を越えて街へと繰り出し娼婦と軽蔑的に交流する。この「男らしい」行動によって二人の仲はさらに深まるが、そのホモソーシャルな行動が隠蔽しているものこそ二人の間の同性愛的感情にほかならない。第一版で語り手は病床で隣り合った男と親友となり、彼と離れ離れになるたびに苦しむ。また彼は浣腸が必要だと診断されることで友人と同じ病院に転院できたが、その際には浣腸ポンプへ賛辞を送る。これらの同性愛的記述は第二版ではことごとく削除され、結果として主人公の行動の動機が不明となる箇所まで出てくる。「背囊を背負って」は「たらいのありがたみ」を感じるスカトロジックな結末が特に有名であるが、それは同性愛的な夢とその後の自決というより論争的な

第一版の結末を修正した、いわば目眩ましのスキャンダルだとみなすことができる。

ワークショップ3

今、ユートピアを問う

コーディネーター：小倉孝誠（慶應義塾大学）

パネリスト：井田 尚（青山学院大学）， 福島知己（帝京大学）， 宮川朗子（広島大学）

2025 年秋に、『ユートピア文学選集』（平凡社ライブラリー）が刊行された。18 世紀末から 19 世紀末の時期に刊行された、ユートピア思想・文学の作品を収めたアンソロジーである。ユートピア文学はアンシャン・レジーム期に隆盛を見たが、革命を経た 19 世紀にも新たな展開を示した。本ワークショップでは、上記の選集に収められた作家、作品を出発点にして、その訳者たちがユートピアの思想と文学をさまざまな視点から考察した。昨今の情勢下では、未来にたいして楽観的になるのはむずかしい。しかし、広義のユートピアに希望を託した人々が世界と社会を変えてきたのも事実である。現時点では存在しないが、近い未来において望ましいものや制度を想像／創造するのも、文学の役割のひとつだった。

当日は多くの会員の参加を得て、発表の後には実り多い質疑応答が繰り広げられた。以下は、各パネリストによる発表の要旨である。（小倉孝誠）

架空の秘境から現実の未来へ 啓蒙期のユートピア小説からコンドルセ
『人間精神の進歩の歴史的一覧の素描』に至るユートピア論の時空の転回

井田 尚

名詞「ユートピア」は、『アカデミー辞典』（1762年）で〔トーマス・モアの〕「著作の題名」、「プラトン『国家』に倣う想像上の政府の計画」と定義されているが、『百科全書』（1751-72年／本文17巻、図版11巻）には、ユートピア（UTOPIE）やその派生語が見出し語として存在しない。理由としては、同書が語学辞典ではないこと、ユートピア論的内容が国家・政府に対する批判として検閲の対象になりかねないこと、百科全書派が空想よりも現実の改革を重視したことなどが考えられる。数少ないユートピアへの言及例となる項目「ウェサン」（地理項目）でも、プラトンやモアが論じた哲学的なユートピア像に対する批判がウェサン島の素朴な徳に対する礼賛と表裏一体をなしている。

もっとも、『百科全書』そのものが、本文における万物の言語による記述と、図版における様々な技術・道具・機械・建築等の描写によって、自然界と人間社会の全てを言語化、可視化しようとする哲学的ユートピアへの欲望を体現しているともいえる。

18世紀には、検閲の回避や啓蒙を目的にユートピア思想を小説形式に託す作家・思想家も多かったが、『バジリアッド』（1753年）や『自然の法典』（1755年）の著者モレリや、『南半球の発見』（1781年）と『アンドログラフ』（1782年）の著者レチフのように、哲学論と小説の両ジャンルを行き来してユートピアを論じ、描く作家達もいた。

ヴォルテール『カンディード』（1759年）やディドロ『ブーガンヴィル航海記補遺』（1772年執筆／1796年刊行）など、啓蒙思想家が執筆したユートピア小説には、同時代の王政国家フランスとその文明社会の欠陥や退廃を浮き彫りにする鏡として徳と自然が支配する架空のユートピアを描きつつ、地上にユートピアが存在し得ないことを再確認する現実主義的な傾向も強く見られた。

一方、メルシエは小説『西暦 2440 年』（1771 年）で未来のパリを舞台に改革後の理想社会を描き、コンドルセは哲学論『人間精神の進歩の歴史的一覧の素描』（1795 年死後刊行）で、理性と科学の進歩に基づく平等、教育、社会保障の普及と人類の幸福の増大を予見した。小説と哲学論とジャンルこそ異なるものの、両者に共通する独創性は、ユートピアを、過去や同時代に設定された「どこにもない場所」としての架空の秘境から、現実社会の改革によって到達可能な未来へと読み替えた、「パラダイム・シフト」ともいべき発想の転換である。進歩主義や社会主義思想・運動などを背景とする 19 世紀のユートピアの文学的・思想的表象の数々もまた、大革命によるアンシャン・レジームの転覆とその予兆を契機とするこのユートピア論の時空の転回を踏まえることで花を開いたと言うべきだろう。

即時実現のユートピア、そのはじまりとおわり
19 世紀フランスのユートピア

福島知己

もともとユートピアは著作上の仮構であって現実的可能性を意図したものではなかったが、19 世紀前半に社会主義的な現実変革の試みが論じられるようになると、ユートピアの現実化は可能かという問題が立てられるようになった。実際、1830 年代から 1840 年代にかけて北アメリカでオウエン主義やフーリエ主義の実験共同体が数多く設立されたことは（多くは 1 年程度で閉鎖）、ユートピアの実現可能性を意識させた。

エティエンヌ・カベが公刊した『イカリヤ旅行記』（1840 年初版）は、イカリヤ国なる架空の国で実践されている財の共有制を物語る政治小説である。主人公のカリスダル卿はイカリヤ国の蒸気船、蒸気鉄道、市内馬車に乗車し、熱狂する。それは蒸気機関やさまざまな機械の発明によって流通網の組織化、高

度化、高速化が実現し、豊かな富が得られるようになったことが、共有制の実現可能性を開いたとカベが考えたからである。

この点でカベにとって財の共有とは公共財の公有を意味する。ただし、カベは公共財の範囲を非常に広く見積もっている。普通選挙による正統性の確保が過剰に信頼され、国民の意思によって承認されたものすべてが公共財とみなされる。イカリア国では新聞が各県に一紙しかないとされるが、それは新聞の編集者が普通選挙で選ばれた代表者によって指名されるからである。

カベは1847年以降、500人近い支持者とともに北アメリカに入植し、イカリア共同体を実際に建設する試みをおこなった。

ジャン=バティスト・ゴダンが1871年に発表した『社会問題の解決法』は、自叙伝的な記述を含みつつ、自説を開陳する論説である。ゴダンは1841年に新聞記事を通じてフーリエの思想を知り、傾倒した（当時フーリエはすでに没していたが、弟子たちのグループが政治活動をおこなっていた）。彼は1854年にアメリカ大陸のテキサスにできたフランス人移民によるフーリエ主義共同体に資金援助をおこなった。この共同体は数年をたたず閉鎖されたが、ゴダンがギューイズの自社の工場で続けた改革の試みの成果が「ファミリステール」である。

ゴダンはフーリエ主義者をもって任じているが、『社会問題の解決法』にみられる労働礼賛論は、フーリエの思想とはまったく別のものである。それは労働を通じた生産が社会進歩を実現するという進歩主義的なビジョンであった。

ゴダンは労資の融和に対して経営者が果たす役割を積極的に提示した。ゴダンに限らず、19世紀後半には労使の協調によって労働条件の改善を図るという考え方が独仏のさまざまな経営者からでてきた（同様の傾向は日本でも見られる）。これ以降、ユートピアの即時実現の試みは、一方では社会政策への志向へ、他方では小説の世界へと移し替えられていった。

ゾラ『労働』、起源と受容

宮川朗子

本発表では、ゾラ『労働』の着想源、この小説で描かれた理想社会の特徴、『労働』の受容について概観した。

『労働』の着想源としては、まず、アナキズム、集産主義、フーリエリズムといった社会主義思想があり、この小説の準備資料にもこれらに関する長いメモがある。そして、これらの思想が、小説においては、それぞれ、陶工ランジュ、労働者ボネール、技師リュック（主人公）によって代表され、リュックのフーリエリズムが他の思想を統合し、理想社会が築かれる展開になる。

また、理想都市を構想する際に、ル・クルゾ、ユニユー製鋼製鉄所、アンドレ・ゴダンが創設した工業都市ファミリストールといった、当時すでに工場を中心として形成された共同体を参考にした形跡も準備資料から認められる。このような現実の工場や共同体の調査は、ゾラの小説作法においては通常行われる準備作業ではあるが、ユートピアという観点からは興味深い。伝統的に、ユートピアは、いまここに存在する社会とは異なる、現在よりも良い社会を構想する。それはしばしば現実とは逆の世界になることがある。しかし『労働』の理想都市ボークルールは、現実の逆というわけではなく、先に挙げた実在する工業都市の問題点がすべて解消された理想都市であり、いわば、現実の修正と飛躍の先に空想された社会である。

このような現実の飛躍は、ボークルールで発明された太陽熱発電、無線通信、化学食品といった発明品にも見出され、これらによって、小説は SF 的な性格を帯びる。しかし、この小説は、明るい近未来的イメージに終始せず、最終部になって、苦しい過去が想起されることになる。確かに、ユートピアの系譜において、戦った過去が想起される作品はあるが、それは、軽く触れられる程度である。しかし『労働』を閉じる、主人公を取り巻く3人の女性が語る恐ろしい内戦や全面戦争のエピソードは、すでに終わったこととして語られるとはい

え、この小説発表後のロシア革命や二つの世界大戦のイメージに酷似し、それらを予言しているようでもある。『労働』のユートピアは、常に戦争と隣り合わせにあることを示唆しているのかもしれない。

続いて、『労働』が文学以外の場に派生した例として、トニー・ガルニエの都市計画、アンリ・プクタルの連続映画『労働』、1970年代、ブザンソン近郊のリップ社で労働運動が展開される中で出版された、この小説に労働者たちが序文を付した版を紹介した。これらの例は、『労働』が、映画、都市計画、社会運動と幅広く翻案されたことを示している。

最後に、ドイツの研究者を中心とした、ゾラ後期の最近の研究動向を紹介した。それらは、『労働』の新たな校訂版、そしてゾラの科学主義や労働観とミシェル・ウエルベックのそれらとの比較研究である。後者が『労働』再評価を促進させるかどうかは、今後の展開を注視する必要があるだろう。

ワークショップ4

クンデラと私——作家を追悼することについて

コーディネーター：篠原 学（大阪大学）

パネリスト：塩谷祐人（明治学院大学），ローベル柊子（東洋大学），

須藤輝彦（東京大学）

本ワークショップは、2023年に世を去った作家ミラン・クンデラを追悼することをその趣旨とするものであった。追悼というテーマには、この作家に固有の重要性がある。というのも、クンデラは小説『不滅』において、不滅の存在

として死後栄光に包まれることへの抵抗を描いているからである。クンデラが遺したテキストは、追悼を、果たすべき務めというよりは、思考すべき問いとして差し出しているように見える。

フランス語の《 *commémoration* 》の訳語でもある追悼は、故人を「共に記憶する」ことをその本質としていると言える。だが、この接頭辞の示す共同性は、故人の死を撤回できない仕方の意味づける、集合的な記憶の強制力に近似することもある。共同的な営みとしての追悼がこの危険に陥ることを回避するためには、その営みに加わる個々人が故人に対する敬意をもつことが必要なのではないか。そうした展望のもと、本ワークショップでは、コーディネーターの篠原学が、塩谷祐人、ローベル柊子、須藤輝彦という三人のパネリストに、各々のクンデラとの関係——「クンデラと私」の関係——に即しつつ、クンデラとその作品について語るよう呼びかけた。以下は各パネリストによる応答である。

パンテオンには眠らない——クンデラの遺言と小説の倫理

塩谷祐人

本発表は、ミラン・クンデラの文学の捉え方、とりわけ「世界文学」の概念と死後の作家の帰属をめぐる議論を手がかりに、国境を越えて創作した作家の「死者としての在り方」をクンデラへの追悼の思いを込めて考察することを目的とした。

クンデラは『カーテン』や『裏切られた遺言』において、小説を国民文学の集合としてではなく、問いを継承し合う「精神の共同体」として捉え、ヨーロッパ文学の歴史を「継続」と「響き合い」の運動として描いている。この視座は、文学を国家やイデオロギーに回収する理解への批判を内包している。

しかし現実の文学空間において、作家や作品は国民的帰属から容易に自由にはなり得ない。パスカル・カザノヴァが指摘するように、世界文学は中心と周縁から成る競争の場として構造化されており、大学教育、出版、顕彰などの制度は、作家を「国民文学」の枠組みに再配置し続けている。こうした構造は、生前のみならず死後においても作家に作用するものであり、クンデラ自身もそのことを強く認識した上で、とりわけ『裏切られた遺言』や小説『無知』で時には正面から、時にはユーモアを踏まえて批判的な立場を示していた。

またアゴタ・クリストフを越境作家として取り上げると、埋葬地（ハンガリー）やアーカイブの所在（ドイツ語圏スイスのベルン）、死後の顕彰のあり方（彼女が過ごしたスイスのヌーシャテルに作られた「アゴタ・クリストフ広場」）は、国家と作家の地理的・制度的・象徴的な結びつきの具体例として挙げることもできる。彼女の場合、遺灰の埋葬地と文学的遺産の保存場所は一致せず、作家としての位置づけは複数の地域にまたがったままである。

クンデラについても、彼自身の意思に基づく埋葬が尊重されている一方で、今後、象徴的存在として回収される可能性は否定できない。

クンデラは小説やエッセイを通じて、死者が国家や愛国心によって象徴化されることへの強い警戒を示してきた。死者を記憶や記号に固定することは、個人の意思や複雑さを奪う行為であり、そこに倫理的な問題が生じる。彼にとって重要なのは、死者を物語化することではなく、その意思に忠実であり続けることであった。

以上より、本発表ではクンデラを「世界文学」の競争空間における象徴としてではなく、「小説の精神」を次代へと手渡した一人の担い手として捉える視点を提示した。国境を越える文学の研究においては、作家の死後の扱いを含め、国家的回収に抗しつつ、小説の自由と個人の自由をいかに継承するかが重要な課題となる。

クンデラが描く「女性」をどう読むか

ローベル 終子

私はこれまでミラン・クンデラを研究する中で、自分が女性であるということをしてできるだけ意識しないようにしてきた。研究をする上で、研究者自身の属性、すなわち国籍や言語、生まれ育った環境、価値観、信条、読書も含む様々な経験は、必ずしも研究そのものに直接反映されるものではないにしても、研究上の着眼やテーマ設定、論じ方と決して無関係ではないだろう。性別もそうした属性の一つだろう。ただ、私は「女性ならではの感性」だとか「女性だからこその視点」といった言葉が苦手なので、クンデラを研究する上でも努めてニュートラルであらうとしてきた。それゆえにクンデラの小説にたびたび向けられるフェミニズムからの批判は見て見ぬ振りをし、その一方で、クンデラの小説の女性登場人物の状況や心情に強い共感を覚え、そのような女性たちの生を描き切るクンデラに感嘆しながらも、クンデラの女性表象については正面から論じてこなかった。

今回、クンデラの追悼として「クンデラと私」について振り返るといふ特別な機会をいただき、こだわりを捨ててクンデラに向き合ってみようと思ひ、結婚し、子どもを育てるようになった私がクンデラの「女性」をどう読むのかについて話してみることにした。当日の発表では、クンデラのセクシズムへの批判、フェミニズム的観点からの批判の限界（ドンジュアニズムが小説家による「真理の発見」に重ねられているなど）、小説における「子や夫を苦しめる母親」の役割に触れた後、『アイデンティティ』において主人公のシャンタルが自分の子どもの死によってもたらされた幸福感に慄くというエピソードを取り上げた。クンデラ研究における「子ども嫌い」や母親のネガティブなイメージは頻繁に指摘され、反出生主義の文脈で語られることが多い。個人の自由が夫婦や親子などの家族関係より優先されるというクンデラの小説の世界観の中ではこのシャンタルのショッキングな告白ですら一種の寓話のようにさらりと読

み流すことができってしまう。しかし、クンデラの（「クンデラ研究の」といった方が正確かもしれない）パラテキストから離れ、シャンタルという一人の女性の物語に注目して読んでみると、彼女の罪悪感、子どもの不在を幸福と感じることのタブー、子どもの「重さ」が数ページにわたり、複数の章で繰り返し描かれていることがわかる。子どもを生んだことの後悔を描くにあたっては、クンデラも慎重になっているのではないか。

たしかにクンデラの小説には良妻賢母型の母親は描かれず、理想像も存在しない。しかし、クンデラ研究においては夫や子に対して支配的な「苦しみを与える妻あるいは母」に必要以上にフォーカスしすぎてこなかったらうか。

「苦しむ母親」も描かれているにもかかわらず、苦しめる母親を重要視すること、ドン・ファン的自由を謳歌する男性登場人物にクンデラの小説の精神を見出し、女性登場人物の不自由さや理不尽さを読み流してしまうこと。これはクンデラが「そのように」書いているからなのか。それとも研究する側のバイアスなのか。今回、発表の準備をしていて驚いたのは、私自身、テレザの弱さに共感しながらも、小説の読み方としては、トマーシュの性愛的友情を優先させる、男性登場人物に寄り添った読みをしていたことだった。結局、クンデラは女性をどのように描いているのか。出発点の問いかけに戻ってしまうが、このワークショップに参加し、パネリストや聴衆の方々からのご質問、ご指摘を通して深めることができた。

終わりと始まり

須藤輝彦

本発表は、おもに長篇小説『笑いと忘却の書』（1979）の再読をとおして、ミラン・クンデラにおける「終わりと始まり」のありようを検討するものである。とくに本作において反復される「終わり」の表象が、ヨーロッパ、ボヘミ

ア（チェコ）、世界という三つの異なる次元において、いかなる構造をもって現れているかを分析した。

クンデラにとってヨーロッパとは、小説、理性、多元主義といった価値が形成された空間であると同時に、歴史的に終焉を迎えたものとして意識されていた。とりわけ1968年以降の政治的経験を通じて、すでに「終わっている」ものとしてのヨーロッパが彼の文学世界の前提となった。

亡命後の語り手が獲得した地理的距離は、祖国を単なる回想の対象ではなく、つねに自身の死＝終わりとともにある小国として浮かび上がらせる。それは小説に独特の語りの構造をもたらし、とりわけ小説第3部においては、語り手と視点人物の重なりによって強い「語りの視差」を生む。この視差、主体の循環的な「包摂」により、過去の語り手を捉えていた「世界」からの眼差しが語りの現在においても捉え返される。

第7部において、黒歌鳥の比喻に象徴される惑星的視点は、国民国家単位の歴史を相対化すると同時に、人間の主体的関与、「私」と地球とのあいだの地理的中間地帯を捨象する一方的な視座でもある。その結果、「世界の終わり」や「人類の希望」も、具体的な経験との接点を失った空疎な言説として表象される。

本作における三つの「終わり」を貫く要素として、距離の問題がある。距離は対象を、その始まりから終わりまで見通す視野を可能にするが、同時に焦点から外れた事物のディテールや重みを失わせる。本発表は、クンデラがヨーロッパの終わりをその内側から見つめ続けた作家であることを確認するとともに、その視野に内在する限界を指摘し、没後の現在において、彼が終わった地点からのクンデラの再読へと開こうとするものである。

これらの応答ののち、会場からは、クンデラの造形する厭世的なヒロインにおける愛することの意味や、子どもという存在に向けられた作家のまなざしについて質問があった。閉会後も、18世紀以来の作家の聖別との関連や、作品の

言語的な帰属について質問・コメントが寄せられた。特定の意味に収斂していくのではなく、むしろ議論の場を押し開くようなこうした多様な反響が得られたことは、それ自体、クンデラに対するひとつの追悼の形であったように思われる。

ワークショップ5

Discussion sur le Choix Goncourt du Japon 2026 : impressions de lecture avant sélection

コーディネーター : Éric Avocat (大阪大学)

パネリスト : Marie-Noëlle Beauvieux (明治学院大学) , Vincent Brancourt
(慶應義塾大学) , Justine Le Floch (京都大学) , Olivier
Sécardin (広島大学)

Si la variété et les contrastes font le sel des compétitions et des palmarès, s'ils font tout l'intérêt qu'il y a à jouer le jeu des jurys et à mener l'exercice des comparaisons, pour les membres prestigieux de l'Académie Goncourt aussi bien que pour les valeureux étudiants qui font vivre le Choix Goncourt du Japon, cet événement n'en constitue pas moins, chaque année, un observatoire de premier ordre pour voir se dessiner les tendances de la création littéraire francophone et saisir l'air du temps intellectuel. L'équipe d'enseignants et chercheurs qui s'occupe de lire et de commenter les huit titres de la deuxième sélection du Goncourt, pour éclairer et préparer les premiers choix des étudiants, a repéré une thématique qui était déjà présente auparavant, mais qui déroule peut-être cette année un fil conducteur plus visible entre les œuvres que nous avons présentées à Nagoya. Tous

ces livres mettent en récit une *politisation de l'intime*, dans le sens d'une prise de conscience renouvelée des enjeux politiques qui croisent les vies personnelles et qui les façonnent. Ils formulent aussi des *politiques de l'intimité*, tirant de la matière autobiographique des pistes de réflexion sur une réinvention de la vie en commun.

C'est à Natacha Appanah que les étudiants ont décerné le Choix Goncourt du Japon 2025-2026, pour un livre, *La Nuit au cœur*, qu'il ne faut pas enfermer dans le statut étroit du témoignage et du document : il importe, à l'inverse, de le réinsérer dans un corpus littéraire dont l'émergence est portée par des mutations sociales et culturelles. La société française, en pointe dans le mouvement #MeToo, qui a aiguisé sa sensibilité aux violences faites aux femmes, s'est donné une prise plus ferme contre les *féminicides* par une saisie conceptuelle plus précise du phénomène : aboutissement d'un continuum de violences et d'abus, le meurtre d'une femme en raison de son genre est une expression pathologique, mais non pas *anormale*, d'un système de pouvoir patriarcal. J. Le Floch fait de ces schèmes définitionnels les outils pour construire la poétique d'un genre littéraire, le récit des violences conjugales : son geste théorique permet de déjouer l'invisibilisation de l'écriture des femmes, et de faire droit à la valeur indissociablement littéraire et politique de l'écriture de Natacha Appanah. (Justine Le Floch)

Le livre de Paul Gasnier, *La Collision*, relève aussi d'un genre en quête d'un statut littéraire : la non-fiction narrative, forme topique de l'enquête journalistique. L'auteur livre le récit d'un traumatisme intime, la mort violente de sa mère dans un accident provoqué par un jeune délinquant, issu d'une famille immigrée. Il lui applique les méthodes de sa profession, par la reconstitution des faits et la recherche de leurs tenants et aboutissants au travers d'une mosaïque de témoignages, reflet d'une société fracturée. Cette recollection achoppe néanmoins sur l'opacité irréductible du jeune coupable, qui esquive les travaux d'approche. Il ne reste alors que l'écriture, pour forer, à travers l'impasse journalistique et sociologique, une voie étroite. Le déterminisme mis au jour

par l'explication des logiques collectives, par la compréhension des conduites individuelles, n'est pas indépassable. La fatalité et la faute tragiques, aptes à prendre en charge les ambiguïtés morales, constituent la matrice dialectique d'une parole complexe, opposée aux discours simplistes des idéologues qui s'acharnent à briser la pluralité sociale dans la *collision* d'une conflictualité généralisée. (Vincent Brancourt)

On note la même fonction libératrice de l'écriture dans le roman de Caroline Lamarche, *Le bel obscur*. Entraînée par sa curiosité pour la figure d'un ancêtre ayant laissé très peu de traces après sa disparition précoce, l'autrice en vient à s'interroger sur le sens de sa vie de couple avec son mari : l'homosexualité est le trait d'union entre un passé familial refoulé et un présent conjugal qui s'étiole. En faisant appel à l'imaginaire, à la littérature, au rêve, l'écriture se donne à la fois comme le cheminement et l'horizon d'une réalisation de soi. (V. Brancourt)

Les résonances politiques de l'intimité sont aussi au cœur de *Passagères de nuit*. Yannick Lahens inscrit, entre biographie et fiction, un diptyque conçu autour de deux personnages inspirés de son aïeule et de sa bisaïeule, dont les trajectoires, entre Haïti et la Nouvelle-Orléans, permettent d'approcher concrètement l'expérience des victimes féminines de l'esclavage et de leurs descendantes. Cette évocation vibrante et nuancée de la force, de l'amour, de la résilience, qui portent les femmes de couleur, met au centre la question de la transmission de mère en fille. (Marie-Noëlle Beauvieux)

Dans *Le Crépuscule des hommes*, d'Alfred de Montesquiou, la thématique se coule dans une optique plus conventionnelle : les interférences entre la grande Histoire du procès de Nuremberg, en 1945-1946, et les petites histoires anecdotiques dont se tissent les à-côtés de l'événement capital pour les spectateurs venus rendre compte. « Ce hiatus entre le jour et la nuit, le léger et le fondamental », qu'évoque l'auteur, déplace la lorgnette dirigée par Alexandre Dumas voulait diriger sur « les grands hommes en robe de chambre ». (M.-N. Beauvieux)

Cette image s'applique assez bien aussi au projet développé par Emmanuel Carrère avec *Kolkhoze*, saga familiale fondue dans une fresque de l'histoire européenne et déployée autour de la figure centrale d'une mère ayant accompli un parcours édifiant d'intégration culturelle et d'ascension sociale, de l'apatride exilée de l'Empire soviétique à l'intellectuelle et académicienne comblée d'honneurs : au-delà des petites et des grandes histoires, le livre trouve son aboutissement dans la conquête, par l'auteur, de sa place de fils tenant la main de sa mère mourante. C'est le fruit d'une patiente œuvre d'écoute, pour faire confluencer les mémoires singulières et les récits pluriels, recueillir la parole brimée du père et de l'oncle, nourrir le récit par les leurs, et, *last but not least*, contrebalancer l'arraisonnement du deuil intime par la parole présidentielle. L'enjeu n'est pas de décaper la légende, mais de se la réapproprier en une énonciation authentique. (Éric Avocat)

Une saga familiale se déploie aussi dans *La Maison vide*, avec une ampleur épique qui traverse cinq générations, un siècle et demi, et deux guerres mondiales, et a sans doute contribué ainsi à offrir le Prix Goncourt à Laurent Mauvignier. Mais son succès tient aussi au contrepoint plus subtil que l'épithète apporte au *lieu commun* de la maison de famille, vestige d'une splendeur passée, pour ouvrir l'espace de la rêverie, du secret, de la divination, mais également de la critique sociale et de la justice poétique. Cette maison *vide* est une allégorie de la mémoire, peuplée de fantômes, que le narrateur tente de ressusciter à partir des traces et des signes énigmatiques conservés par les objets, les meubles, les photographies. L'enquête archéologique cherche à faire parler les silences, à dire ce qui n'avait pas vocation à être dit, pour comprendre que les histoires jamais racontées sont les véritables rouages des formes incorporées de la violence. La maison fonctionne comme une métonymie de la communauté (*oikos*), c'est-à-dire, en l'espèce, comme le foyer d'une *dynastie* régnante (comme on parle de la maison de Bourbon, de la maison Windsor), qui a établi son empire sur un coin de France rurale. Au rythme des soubresauts de l'Histoire, le récit nous fait assister à sa reconstitution (avec l'avènement

de « la Patronne », qui comble l'absence des hommes pendant les quatre longues années de guerre en 1914-1918) et à sa décomposition : le « vide » qui gagne accuse la faillite d'un ordre social vidé de sa substance, après avoir broyé les femmes qui le soutenaient au prix de leur bonheur, de leur liberté, de leur vie même. Ce discours féministe correspond à la focalisation du récit sur les trois héroïnes qui incarnent une continuité intergénérationnelle ayant fermé pour elles toute perspective d'épanouissement et d'émancipation. (Olivier Sécardin)

II 書評

Guilhem Farrugia (dir.), *Influences de Baudelaire*, Presses Universitaires de Rennes, 2025.

評者：中島淑恵（富山大学）

ボードレール自身が既に言っていたように、「ボードレール派」というものは確かに存在する。本書は、この「ボードレール派」のありようを多角的に検証するために、ボードレールの作品にその影響あるいは同一性がみられる先人との比較を始めとして、同時代の作家たちとボードレールの相互的な影響関係、さらには後世の作家たちに与えた影響やその反響について15人の論者がそれぞれの見地から論考を展開しているものである。編者ギエム・ファルツジャによる序説に続けて、全体は時系列およびテーマに沿って4部に分かれる。すなわち、ボードレールの作品にその影響が伺える過去の作家について論じる「靈感」の章、ボードレールの同時代の作家との影響関係について論じる「磁気」の章、ボードレールの後進の作家に対する影響について論じる「光輝」の章、後世の作家にボードレールが及ぼした影響について論じる「影響」の章よりなる。

「靈感」の章では、まずジャン・ルコワントが、バロックの概念論的な美学を採用したボードレールが、それを古典的詩学や功利的かつ営利的な「モデルニテ」に対置させていることを指摘する。これに続きジャン・デュブレーは、パスカルとボードレールの間にもジャンセニスムに端を発する類縁性があること、しかし両者には宗教的志向と道徳的志向という相違もまた存在することを、具体例を挙げながら指摘している。ギエム・ファルツジャは、『パリの憂愁』にはルソーの『孤独な散歩者の夢想』の影響が随所にみられ、とりわけその「悪魔」が小散文詩集には遍在していることを指摘している。これに続きナタリー・ヴァンサン＝ムニアは、後世に絶大な影響を及ぼしたボードレールの散文詩について、アロイジウス・ベルトランとピエール・デュボンがもたらした影響について論じている。

「磁気」の章では、パトリック・ラバルトが、ボードレールの著作にしばしば現れる「共犯」という概念が、英雄主義とマキャベリスムへの傾倒を示していると指摘している。これに続きジュリアン・ザネッタは、ボードレールの同時代の美術批評について、これまであまり顧みられなかったフィリップ＝オーギュスト・ジャンロンやフィリップ・ドゥ・シュヌヴィエールとの類縁性について考察している。さらにステイーヴ・マーフィは、同時代の反転ソネットの系譜の中で、ボードレールの「ここから遠く離れて」が重要な転換点を示していると指摘している。さらにアルノー・ベルナデは、高踏派詩人たちの間で、ボードレールの詩法がどのように引き継がれているかについて考察している。

「光輝」の章では、まず築山和也が、ロートレアモンが、ボードレールの詩におけるモデルニテの不確かさといったものを継承しながらも、道徳上の確かさへと至ろうとしているさまを描写。これに続きベルトラン・マルシャルは、単なるボードレールの信奉者であった初期のマラルメから、危機の時代を経て独自の詩学を獲得するに至るマラルメを活写している。中地義和は、ボードレールの詩的靈感がランボーの詩学の琴線に触れるものでありながら、それがランボーの「同化」に特徴的な本質的な変容を遂げていることを指摘している。

「影響」の章では、フランソワ・ラルエが、ピエール・ジャン・ジューヴは『悪の華』に特徴的な悪魔的かつ嗜虐的傾向は仮面に過ぎず、その深層で、言語とイメージによる詩的創造が企図されていると考えていることを指摘している。パトリック・ネーは、「憂鬱と理想」と「パリ情景」を対置させることによってボードレールの作品の解釈を刷新したイヴ・ボヌフォワについて論じている。ドミニク・コンブは、象徴主義の潮流の中で、フランス詩人ボードレールが、ヴァレリーが評したような汎ヨーロッパ的な詩人となる展開をたどり直している。フランソワ＝ジャン・オティエは、ボードレールの文学的神話が、後世にはその作品や著作そのものよりも詩人の生涯を辿る伝記的小説あるいはバンド・デシネ等ロマネスクなものによって再構成されていると指摘する。

このように本書は、単なる個別の論考を集めた論集ではなく、プレイヤード派の詩人から現代作家までを時系列で並べることによって、「恐るべき重力を逃れて」「蒼空に上り」「天文学者たちのように空に寄り添」おうとする「蒼空の星」たるボードレールの「磁場」の特性が明らかになるように配置されている。それは編者が言うように、後世の詩人たちに及ぼされた、惑星ボードレールの影響と詩におけるモデルニテの星座の布置が、フランス文学史におけるボードレール作品の磁力を帯びた論理を理解するためには不可欠のものだからであり、そこに体現されるモデルニテの理解なしには、今日のボードレール理解、あるいはそこからさらなる詩的展開は不可能だと思われるからである。

ミシェル・ビュトール『ミシェル・ビュトール評論集 レペルトワール IV』、石橋正孝監訳、幻戯書房、2024年

評者：塚本昌則（東京大学）

言葉による迷宮を目のあたりにしたいなら、まず繙くべき本だろう。

ミシェル・ビュトールは一九五四年から六〇年にかけて、四冊の小説を発表、ヌーボー・ロマンの旗手とみなされていた。ところがその後、小説から離れ、『土地の聖霊』シリーズ、『夢の物質』シリーズ、評論を集めた『レペルトワール』、ジュネーヴ大学での講義録である『即興演奏』、さらに全集で三巻となる詩と、多様で、多層的、しばしばジャンル分けの難しい膨大な量のテキストを産みだした。

そのなかにあって、ずっしりと重い『レペルトワール IV』を手にとると、膨張しつづける宇宙のようなビュトール世界の何が掴めるのか、心もとない気持ちになるのも致し方ない。『レペルトワール』自体が広大な想像世界の一角を占めるにすぎず、それに全五巻中の第四巻目とシリーズの途中である。しかも、ここには『絵画のなかの言葉』のように、単行本として出版されている評論から、数ページのエッセーにいたるまで、主題も長さもまるで異なる言葉が集められていて、迷宮にさまよいこんだ気持ちになるのは必定である。

しかし、とにかく手に取って読みすすめる。すると、確かな導きの糸があるのがわかる。見かけの多様性にもかかわらず、そこにはつねに「現象学的」な眼差しがあるのだ。どのようにして意識に現れるのか、という視点から、ビュトールは対象を捉えようとしている。基本的に文学と美術を論じながら、話は旅、顔、モード、タイプライターとさまざまなテーマに広がっていく。そのたびに、意識にやきつく奇妙な細部が積みあげられてゆく。ラブレールの小説にあらわれる長くて複雑な数字。『失われた時を求めて』の各編で鍵となるさまざまな寝台。ゾラの小説に描かれた、アルコール中毒の果てに、自然発火し、座ったまま青い炎につつまれて焼死する老人。それぞれの文章は、相互に関連のないものだが、対象が意識のうちにどのように現れるのかという疑問を追求する態度は一貫している。この本がテーマ批評を確立したジャン＝ピエール・リシャールに捧げられていることも納得できる。

しかも、ビュトールの「現象学的」眼差しは、細部から作品を大胆に読みかえてゆくだけにとどまらない。その眼差しは、何があるのかすぐにはわからな

い対象にも向けられているのだ。スウェーデンの作家ペール・オーロフ・スンドマンの小説を論じる文章で、ビュートルは森の沈黙に注目する。森は無数の音に満たされているのに、森で過ごす最初の数時間、深い沈黙を感じるというのだ。合図を読みとることができず、合図があることすらわからない人に、森の音は聞こえない。ということは、森の発する数多くの合図を、誰かが代わりに読んでくれない限り、その人は森のなかで生きていけないということである。

森について言えることは、世界そのものについても言えるだろう。世界はざわめきに満ちている。ざわめきのうちに、何が語られているのかを聞き分けられないかぎり、そこに何があるのかわからない。だから、合図があると気づき、合図を読み解く術を知っていれば、あるいは自前で解読する術を編みだすことができるなら、そこには無限に変化する世界の姿が見えてくる。ビュートルはそのようにして、例えばヒエロニムス・ボスが描く、多種多様な人物ともとの意表を突く結合のうちに、秘められた言葉があると確信する。それは沈黙の世界ではなく、今では忘れられた言葉を語りかける森のようなものなのだ。まだ聞こえてこないその言葉を発見しないかぎり、絵そのものが完成しないとビュートルは考えている。ボスの絵は、その意味で、新たなテキストを無限に生み出す潜在的な力にみだされている。

ビュートルの「現象学」では、合図などあるとは思えないところに、秘められた記号が発信されていると気づくことが重要である。鳥の言語を理解し、植物の秘められた成長を見破りたい——そんな思いが伝わってくるのだ。しかも、とりわけ文学作品が対象となるとき、ビュートルは解読の作業に満足せず、その作品がどのようにして創られているのかを探ろうとする。例えば、ゾラの世界は、ビュートルによれば、ひとつの実験として作られている。ある情熱にとらわれた一人の登場人物が、特定の状況においてどのように振る舞うのかを知るために、ゾラは舞台を綿密に組み立てる。現実には起きたことがない、例外中の例外である状況において、物事がどのように起こりうるのかを、読者を証

人として実験する——ゾラの小説はそのように作られているというのだ。ビュトールの「現象学」は、制作学（ポイエティック）という顔ももっている。

小説『心変わり』では、ローマにいるセシルを思いながら、主人公はルーブル美術館所蔵の絵でパンニーニが描いたローマを詳述していた。『レペルトワール』では、登場人物という枠組みを取りはらった自由な意識が、この世のあらゆる事象を記述する。小説という枠組みの外に一歩踏みだせば、ひとは無限に多様な世界のざわめきに開かれることを、ビュトールの迷宮は示している。

大出敦『余白の形而上学 ——ポール・クローデルと日本思想』、水声社、2025年

評者：大須賀沙織（東京都立大学）

詩人ポール・クローデルがどのように日本、そして中国の宗教を見つめ、核心をとらえ、ときに誤解しつつ、彼独自のフィルターをとおし受容していったか——、クローデルの感覚と、歴史的背景が明晰に解きほぐされていく。私はこれまで、クローデルの講演テキスト「日本人の魂への眼差し」（『朝日の中の黒い鳥』所収）などをとおして、クローデルが日本の信仰の本質を、日本人の私たち以上に見抜いていることに驚き、その視点をおして日本文化を再発見させられてきた。本書では、そうしたクローデルの視点の源泉となる文献と、彼が置かれていた状況、彼が触れた日本の信仰がわかりやすく解説されており、読者は重層的理解へと導かれる。フランス大使として中国、日本に滞在したクローデルの、神道、仏教、老荘思想をめぐる考察はひとつひとつ、日本の信仰、文化の再考を促し、フランス文学を専攻してきた私たちも、自分の土壌を学び直さなければ、という思いを新たにさせる。

クローデルの思想をめぐるこの大著については、すでにクローデル、マラルメ研究者の方々（学谷亮氏、黒木朋興氏、根岸徹郎氏）によって、全体を包括する優れた書評が書かれているので、私は個人的なレベルで、読みながらとくに印象に残った点と、黙想したことについて綴っておきたい。

第1章では、クローデルの信仰の出発点となった、パリのノートルダム大聖堂での神秘体験の意味が、旧約聖書の『箴言』と『ルカによる福音書』をもとに、詳しく解説されている。「神を無媒介に知る」体験と、それを裏付ける聖書テキストをとおして、クローデルは、知恵なる神＝イエスが人間のもとに「常に臨在していること」を確信したのだ（p. 41-43）。存在すら知らずにいた「無規定・無限定」の超越者に突如触れられる、若き日のこの体験は、クローデルの思想の核となり、日本の自然（第2、3章）、能（第6章）、文楽（第7章）、水墨画（第9章）、俳諧（第10章）を見る目にまで投影されていく。

第2章、第3章では、日光におけるクローデルの足跡と、日光修験の聖地である中禅寺湖畔の状況が鮮やかに描かれ、クローデルを知って以来訪れたいと思っていたこの地——詩人が自然の調和を見出した場所、「自然と宗教が合一したかのような」（p. 88）場所——への憧れがいや増した。第9章では、浮世絵がもてはやされ、水墨画の価値が理解されなかった時代に、禅の精神性、余白の美しさ、「無としか表現できないものを表し」、「雪の本質を現前させる」（p. 247）余白と、そこに立ち現れる「蝶」の象徴性を深く感じとったクローデルの心の機微が解説されている。

神道との関連を論じた第3章と、仏教の虚無思想を論じた第4章は、とりわけ強く心に触れ、私自身の関心と共鳴し、黙想へと誘われた。私はこれまでフランスにおける仏教理解（誤解）への強い違和感と、それを正す術のない無力感を感じてきたが、本書では、なぜ19世紀のヨーロッパで「仏教とは無の信仰であると理解されて」（p. 115）きたか、その原因と経緯が明らかにされている。クローデルも、仏教において「無が究極の状態であり、無に至ることを仏陀＝釈迦が説いている」（p. 133）とみなし、批判していた。しかしそれは、

当時のフランスで理解されていたように、クローデルが仏教の「空」(vide)を「無」(néant)ととらえ、「無とは何もない世界で、空漠とした深淵に至ることが悟りである」(p. 133)と理解していたためであった。涅槃ニルヴァーナという悟りの境地が「魂の消滅した無の状態であり、それを目指すのが仏教である」(p.139)という説が確立されてしまっていたせいでもある。

これを読みながら思い出したのは、長いこと胸に引っかかっていた、クローデルとカルメル会修道女の「無」をめぐる対話であった(Louis Chaigne, *Vie de Paul Claudel*, p. 177)。クローデルは、カルメル会修道女が語る十字架のヨハネの「無」(rien)と、仏教の「無／涅槃」(nirvana)がどう違うのか理解することができず、両者ともに受け入れることができずにいたのだ。カルメル会修道女によれば、無は存在を破壊し、消滅させるのではなく、無になることで神に満ち、「神の中で全能力が花開く」ことになるのだが、神に意識を集中することも、念祷(内的祈り)の状態に身を置くこともできずに苦しみ、その代わりに十字架の道行きなどの外的実践をとおして神にいたろうとしていたクローデルにとって、無の境地にいたることは不可能に思っていたのだろう。おそらくそれは宗教を問わず、自意識や自己の能力を捨てて無になることの意味、自我を捨て空っぽになる感覚がつかめない人々の多くがぶつかる壁なのだろう(ボシュエもそうだった)。しかし、本書を読むと、クローデルはその後、老荘思想の「無」=「万物の起源(母)となる(道)」(p. 147)を知り、「日本型の複合的な信仰」をとらえ直し、「日本独自の無を見出した」ことで、「無の評価」を「逆転」させたことがわかる(p. 150-153)。クローデルがこうしてたどりついた「無」は、十字架のヨハネやギユイヨン夫人の思想といかに響き合っていることか。宗教の違いを超えて、仏教、カルメル会の靈性、静寂主義はそれぞれ「空」、「無」の状態の中に、神にいたる道を見出し、同じものを求めてきたのだ。そしてクローデルもどうやら、彼独自の思考と体験を経て、それに近い認識に達していたようだ。長年胸につかえていた問題にひとつの、救いとなる答えが与えられた。

クロード・ピショワ、ミシェル・ブリックス『ネルヴァル伝』、田口亜紀、辻川慶子、畑 浩一郎訳、水声社、2024 年

評者：鈴木啓二（東京大学名誉教授）

「訳者あとがき」にあるように、このピショワ、ブリックスによる『ネルヴァル伝』（原著の刊行は1995年）は、同じピショワ、ブリックスの二人が、編集者、主要協力者として刊行に関わった、プレイヤード版全三巻の『ネルヴァル全集』（1984-1993年）と密接な関係にある。本文だけで400頁近くに及ぶこの長大な伝記の最後に置かれた、「いまやネルヴァルを読まなければならない。ネルヴァルの全てを読まなくてはならない。この本がそのきっかけとなるのであれば、それで本書の目的は果たされたことになる」（p. 394）という言葉は、ネルヴァルをめぐる膨大な資料的事実の集積としてのこの伝記が、「ネルヴァルの全て」、「ただネルヴァルだけ」を原則として編まれた、プレイヤード版『ネルヴァル全集』のテキストへと直接接続されることを意味している。

しかし、伝記と、ネルヴァルのテキストとのこの接続が、単線的になされることはない。「訳者あとがき」の言葉を借りるなら、この『ネルヴァル伝』は、「一九世紀フランスの社会と文壇を背景にして一人の文学者を追ったルポルタージュ」（p. 518）のような性格をもつ。そこでは、一方向的・還元的な（例えば専ら秘教的な）テキスト読解は厳しく退けられ、かわりに、多方向に拡散する事実や証言が、「伝記」の首尾一貫性を脅かしかねない細部の氾濫を伴いながら、時間軸に沿って提示される。

そこで扱われる主題は、「メセナなきあとの文学者はどのように日々の糧を稼ぐのか」、「一九世紀のフランスではどのようにして本が刊行されるのか、精神病患者は扱われるのか、メディアで論戦を繰り広げるのか […]」などきわめて多岐にわたる。こうして、全23章と「後世へ」と題された終章からなる本書は、無数の事実の編年的叙述を通じて、「ジェラルール・ラブリュニーとい

う一人の人間の生き様」と、「彼の生きた時代」を浮かび上がらせる仕掛けになっている。

そのネルヴァルが生きた時代とは、「あらゆる信仰が粉碎されてしまったあの相次ぐ革命と嵐の日々に生まれた」（『オーレリア』）者たちの時代に他ならなかった。そして、我々は、『ネルヴァル伝』全篇を通して、この無価値と隣り合わせの諸価値混淆の中で、ネルヴァルの「根」の探求が、常に深刻な困難とリスクにさらされながら、限りなく続けられていくのを見る。

「ジェラルールの四つの家系」と題された第1章は、ジェラルール自身も試みたであろう、無限に枝分かれしていく家系の遡行（詳しい家系図は巻末に収録されている）という、眩暈を催させるようなアイデンティティ探求の作業を、いわば実証的になぞり直している。しかし、こうした懸命の「根」の探求は、ネルヴァルにあっては、ついに、現実と空想を隔てる界面を溶解させる地点にまで押し進められる。彼が1841年の発作時に作成した、ボナパルト家や、皇帝オットーの騎士たちとの仮想の血族関係を含む、「幻想家系図（別名「狂気の家系図」。p. 272 の直後にその写真が掲載されている）」は、まさしく、根こぎの時代の根の探求が、狂気をはらむ地点にまで至りうる事実を示している。

シルヴィ・レキュイエによれば、この「幻想家系図」にはまた、コンデ公、ル・ペルチエ、ジョゼフ・ボナパルト、フーシェール男爵夫人という、モルトフォンテーヌ城の所有者だった四人の名が記されているという。

『ネルヴァル伝』第3章「子供時代」の、モルトフォンテーヌの歴史を辿る箇所は、これら四人を含む、城の歴代の所有者たちについての詳細な情報を提供している。それによれば、ルイ・ル・ペルチエの後、城の所有者となった銀行家（財務官）ジョゼフ・デュリュエは、1794年3月に、国王ルイ15世の公妾ジャンヌ・デュ・バリエの利権に関与した廉でギロチン刑に処せられたという。ジョゼフ・ボナパルトは、ナポリ王、スペイン王となったあと、ワーテルロー後にアメリカに逃亡し、フランスへの帰国がかなわぬまま、最後はイタリアで没する。そして、コンデ公は、1829年に、モルトフォンテーヌの城を含む財産

をフーシェール夫人に遺贈するという内容を含む遺書を書いたあと、翌1830年に謎の縊死を遂げる。

こうして、モーリス・バレスがネルヴァルの「根」を見出そうとしたヴァロアの地も、父祖伝来の、憂愁を帯びたおだやかな家郷であるだけではなかったことがわかる。ここでもまた、「根」の探求は、「あの相次ぐ革命と嵐の日々」の混沌と狂乱に、確実に貫かれた土地をめぐってなされているのである。

本書第14章には、ドワイエネ時代のネルヴァルの仲間であったエドゥアール・ウルリアックが、同じドワイエネ仲間のヴィクトル・ルーバンに書き送った、ネルヴァルの狂気の発作を知らせる、未発表の興味深い手紙が収録されている。そこでウルリアックは、ネルヴァルの錯乱の理由として、彼の「困窮」、「無節操な精神」、「完全な無知」、「うわべから[の]判断」「支離滅裂な考え」などを挙げ、その上で、「ぼくらだって皆彼のような想念を抱いた、と書いている (p.202)」。と同時にまた、ウルリアックは、ネルヴァルの狂気が「治癒不能」となったのは、まさしくネルヴァルが、「より穏やかな人間だった」(この箇所、引用者訳を使用)からだ、とも書く。

ネルヴァルが経験した無価値的混乱は、この時代を生きた誰もが経験した、時代そのものの病態であった。ただネルヴァルは、他の誰よりも無防備に、この時代状況に身を晒した。そして、驚嘆すべき明晰さで彼の体験を書き留めた。ピショワ、ブリックスの『ネルヴァル伝』は、時代の只中に身を置くネルヴァルの、多様な生の軌跡の叙述を通して、そのことを我々に教えてくれる。

宇野木めぐみ『時代で読み解く一八世紀フランス文学 ——旧体制下の読書熱、サロン、哲学者たちの闘い』、大阪大学出版会、阪大リーブル78、2025年

評者：阿尾安泰（九州大学名誉教授）

本書は、コロナ禍の遠隔授業の講義原稿を元にしてしている。使用されている「です・ます」調は講義の雰囲気をよく伝えている。繰り返し紹介される「学生からの質問・感想へのコメント」からは、一方的に知識を伝えるのではなく、授業を双方向的なものにしようとする宇野木氏の熱意が感じられる。

同氏がこうした姿勢を取るのも、18世紀という時代が限定的な形で理解されることが多いからである。もちろん、この時代のなじみが少ないというわけではない。フランス革命、マリー・アントワネット、啓蒙思想などはよく知られている。しかし、逆に言うと、そうしたキーワードに頼りすぎて、それ以外の側面は人々の意識に上りにくいのではないだろうか。そうしたいびつな18世紀像に対して、複雑な動きを呈するダイナミックで「振れ幅の大きい」時代の姿を示すことが求められている。

偏ったイメージから脱却するために、二重の戦略が導入される。近付くと同時に距離を置くのである。例えば現代のコロナ流行を話題にして、疾病対策という観点から18世紀と現代とを関連づける。比較を通じて過去との距離は縮まっていく。しかし、これだけでは十分ではない。いくら18世紀を現代に近づけるといっても、同一視してはいけない。その世紀の独自性をつかまなければならない。今度は現在と過去を隔てる距離を確認する必要がある。そうしてこそ、18世紀を適切に位置づけることができる。たとえば、今では当然と思われている高い識字率も、啓蒙の世紀として知識の流通が強調されていても、この時代の割合は驚くほど低く、男女差も顕著に表れているのである。そうした特徴に注目してこそ、18世紀の独自性が明らかになるとともに、現代との安易な同一化という罠に陥ることからも守られる。こうしたアプローチにより、限定的なイメージに縛られることも、無自覚な一体化に陥ることもなく、多様な展開を見せる18世紀の姿を目にすることができるのである。

しかし、ここで満足して、本書が18世紀文学に対する優れた導きをなしているという指摘だけにとどまってしまうとしたら、どれほど宇野木氏の意図する射程を見失っていることになるだろう。今こそ、サブタイトルの冒頭にあげら

れている「旧体制下の読書熱」に注目すべきである。それに続く「サロン」、
「哲学者たちの闘い」はこれまでもこの世紀の特色を述べるのによく用いられて
きたキーワードと言える。そうした常套句をさしおいて「旧体制下の読書熱」
が先頭に来ていることの重要性に気づくべきなのである。宇野木氏は、「読書」
という語を通じて、18世紀のこれまで強調されることのなかった側面を明らか
にしようとしている。そして、その際に重要な導きとなるのが、「小説」、
「女性」である。これらの語を頼りとして、この世紀の文学の姿が語られてい
く。

この時代の「読書」のあり方は、現在人々が一般にイメージするものとは異
なっている。個人が一人個室で、静かに本に向かう行為に尽きるのではなく、
高くはない識字率を背景として、文字を読めない人々を引き込んでの集団的な
音読読書も同時に行われていた。そうした混在した状況をふまえてこそ、新しい
読者層の出現や書物が高価であるために読書クラブを通じた書物へのアクセ
スなどを述べることができるだろう。

そしてこの時代、「小説」が勃興していくものの、それはこのジャンルが評
価されたというわけではない。むしろ小説は地位の低いものとみなされた。有
害論が一般的であり、有害論を意識しながら、それをかわすように作家活動が
なされていったのである。さらに作家たちの多くが用いたのも、現代では少数
派となった書簡体であることも特徴的である。小説有害論者が主たる論拠とす
るのは、小説が想像力をいたずらに刺激して、無益な空想に読者を浸らせる
ということである。堅実な地盤を持たない空しい世界に読者を突き落とすとい
うわけである。

ここでその魔力の犠牲になりやすい者の姿が強調される。それが「女性」で
ある。女性は構造的に過敏な想像力を持ち、小説からの影響を男性よりも受け
やすいと当時考えられていたのである。当時の女子教育論、啓蒙的医学書など
は、そのことを繰り返して語っている。小説の危険性にたいして、女性は脆弱な
存在とみなされた。少なくともそうしたパラダイムの下に女性像が構築されて

いたことを、18世紀文学の理解の上で、見逃してはいけない。そして、そうした女性の表象は文学にとどまらず、絵画の世界にもみられることが指摘される。「悪」としての小説、その犠牲者としての女性という配置はこの時代の女性作家の位置づけにも影響を及ぼしている。小説と読者としての女性が形成する「悪」の連鎖があり、そこに加担する者とも捉えられかねない18世紀の女性作家の存在は、その活躍にもかかわらず、以後の文学史からも姿を消していくことになっていった。女性作家の現在における復権については、今回の刊行に際して新たに書き加えられた第9章において強調されている。

読書をめぐるこうした興味深い18世紀論はすでに、宇野木氏の優れた博士論文に現れていた。それがより鮮やかな形となって結実したのが、『読書する女たち——十八世紀フランス文学から』（藤原書店、2017年）であった。この流れの中に、本書はある。18世紀フランス文学を学ぶ学生のための啓蒙書に見えた本書は、こうした研究上の貴重な成果を着実に踏まえた上で作成されたものであった。羊の皮をかぶったくらいの狼ならば、見破るのはそれほど難しくないだろう。しかしすっぽりと隈なく全身を羊の皮で覆って、群れの中にいる狼を見抜けるかどうかを、本書は問いかけているのかもしれない。

福島知己（編）『シャルル・フーリエの新世界』、水声社、2024年

評者：王寺賢太（東京大学）

本書は、シャルル・フーリエをめぐる日仏14名の寄稿者の論考からなる論集である。編者の福島知己は、これまでフーリエの『愛の新世界』と『産業の新世界』に周到的な解説を付した訳業を公刊してきた。こうしてあらためて日本語になったフーリエの著作をどのように読み直すか——この問いに対する寄稿者

各人の応答を通じて、日本の読書界にフーリエの再導入を図ることこそ、本書の目論見である。

フーリエは、社会思想史上長く「ユートピア的」社会主義者の一人として位置づけられてきた。1960～70年代のフーリエ再評価も、マルクス主義以前に遡って、マルクス主義とは異なる社会主義の理想像を探究することと無縁ではなかっただろう。当時初めて公刊された『愛の新世界』は、食欲や性欲を筆頭とする情念の新たな組み合わせによって、人類規模で快樂の享受の最大化を実現する「調和社会」の展望を示すものでもあった。同時に、珍奇な新造語やアナロジーを連発しながら、あくまで淡々と分類と列挙を続けるフーリエのテキストは、少なからぬ文学者たちの関心を惹きつけてきた。現在フーリエを読み直すことは、そのようなかつての再評価のなかで確立されてきたクリシェと一線を画すものにならざるをえない。

本書は、社会思想史上のフーリエの位置を論じる第 I 部に始まり、建築・美術・恋愛・産業といった個別の主題をとりあげる第 II 部、ベンヤミン／クロソウスキー／クノーラにおける受容を検討する第 III 部のあと、近年のフーリエ研究についてのサーヴェイ論文を挟んで、現代の創作や思想の実作者たちの論考を収める最終第 IV 部で締めくくられる。過去の限定された文脈の中での読解から、現在の受容・変奏に向かって、様々な論考が連ねられていくのである。以下では、評者の関心を惹いた論考を中心に、本書が示すフーリエ像のいくつかの側面に触れておきたい。

そのうち本書冒頭に置かれた篠原洋司の論文は、文明社会擁護の観点から奢侈を肯定した18世紀の政治経済学との対比で、フーリエが文明社会における快樂の享受の不均衡な分配を厳しく批判しながら、むしろ奢侈と快樂の最大化に向けて、経済的生産体制から家族制度までを再考したことを強調する。18世紀からの連続性と断絶を視野に収めながらフーリエを再検討する姿勢は、本書所収の他の研究にも通じるもので、フーリエと初期社会主義を思想・文化・文学のより広い歴史的スパンで再考するよう促している。

この点、藤田尚志は、一夫一婦制の家族制度のイデオログとしてのヘーゲルとの比較で、個々人の性的快楽を時間的経過の中で再配分し、多様な性愛の関係を可能にする多婚制を構想するフーリエの独自性を際立たせる。フーリエ的共同体は、「家族」・「市民社会」・「国家」からなるヘーゲル的な資本主義国家の秩序構想を、《civil》(民法・民事)の領域から出発して再編成しようとするものだったと言ってもよいだろう。藤田によれば、このフーリエの構想は、ナポレオン法典成立後の地平で、フランス革命期以来の婚姻論・家族論を復興し、再展開するものでもあった。

一方、森元庸介はこのフーリエの歴史上の特異性についてまた異なる展望を示している。森元は、フーリエのキーワードである《industrie》(産業)が、西欧思想史上、「作為」を意味することを指摘した上で、フーリエにとって情念の組み合わせを司る「密謀情念」が、さらにゆきずりの出会いへと人を引き寄せる「蝶々情念」に従うことに注意を促す。それが示唆するのは、《industrie》が産業資本主義の巨大な社会機構に呑み込まれる時代のとば口にあって、フーリエにおいてはなお手仕事の感触を残した協業の発端に、人と人の偶然的な出会いの場が空隙としてとどまり続けているという事態でもあるだろうか。

とはいえ本書の特色は、これら一連のフーリエの歴史的意義の再考にとどまらず、あくまでも現在われわれ自身がフーリエをどう読むかを問おうとする点にある。その第IV部ではまず、阿部日向子が、自作の詩作品の註解のかたちで、女性の地位や性愛の関係にまつわる拘束について自身が抱いてきた感慨や思索を振り返りながら、フーリエの『愛の新世界』への共感と疑問を率直に記しているのが印象的だった。他方、郡司ベギオ幸夫は、肉体的結合を禁じられた「天使カップル」の精神的恋愛こそが、他のさまざまな肉体的恋愛の組み合わせを可能にするというフーリエの議論に注目し、そこに共立不可能な二者のあいだの矛盾を受け入れ、システムのなかに外部を導入する構造を読みとって

いる。この構造こそが、情報データの量的処理に終始する「人工知能」を超えて、質的に異なるものの「創造」を生み出す余地を確保するというのである。

紙幅の関係上、すべての論考に言及することはできなかったが、多様であるがゆえに、あちこちに齟齬や空隙をひそませたこの充実した論集は、それ自体よくフーリエ的世界の似姿たり得ていると思う。この論集がフーリエの再読を促し、死にきれずにいる文明社会のそこかしこで、また新たな創造を触発することを期待したい。

「échos（会員投稿欄）ご投稿のお願い」

échos（会員投稿欄）では、会員の皆様から広く投稿を募っています

◇ 内容について フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセーを広く募集する。例えば、自分とフランス語圏文学とのかかわり、学会とのかかわり、内外の講演会やシンポジウムの体験記、支部会イベントの報告など。

◇ 分量 cahier 2頁分（2000字程度）を上限とする。

◇ 掲載の可否について 研究情報委員会での審議を経て掲載の可否を決定する。掲載の可否については個別に対応していくことになるが、最低限の基準として以下の項目を設ける。

特定の個人や団体への誹謗・中傷のあるものは掲載しない。

「フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセー」であること。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjllf@yahoo.co.jp

* 掲載の可否についての個別のお問い合わせには、原則として応じかねます。

* 内容に相違のない範囲で、軽微な修正を施した上で掲載させていただくことがあります。その場合にはご連絡いたします。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌cahierおよび学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇ 目的 日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇ 書評の対象 原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇ 推薦要領 学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文（200字程度）を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：cahier_sjllf@yahoo.co.jp

また、学会ウェブサイト cahier電子版の「書評コーナー」に掲載する書評も以下の要領で募集しております。

◇ 目的および書評の対象 上記の書評対象本と同じ。

◇ 執筆要領および締め切り、原稿送付先 学会員による他薦の書評あるいは自薦の自著紹介で、著書名・書名・出版社名・発行年等を除いて800字以内の原稿を随時受け付けておりますので、上記の宛先にお送りください。

なお、これらの書評のうちcahierにも掲載するに相応しいと委員会で判断したものについては、他薦の場合はcahier用に2000字程度に手直しをお願いすることがあります。また、自薦の場合は委員会で執筆者を選定して依頼します。

cahier 37

編集 研究情報委員会

発行日：2026年3月31日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL：03-3443-6671 FAX：03-3443-6672